

## 10周年を迎えて

おかげさまで太田東西薬局は本年4月で10周年を迎えることが出来ました。思えば、10年前、「こんな田舎で漢方専門薬局を開業して大丈夫だろうか？」と不安になったものでした。「本当に食べていけるのか？」と...。当時、私は31歳。妻は東京育ち。息子は5歳と2歳。あれから10年。息子は高校1年生と中学1年生になり、私は41歳。さまざまなご相談を受けてきて、「よくここまでやってきたな」と思います。開業2年目の夏には、疲労とストレスから自らリンパ節炎となり、約1ヶ月微熱が続きました。食欲もなくなり、気力体力も落ちる。昼間、毎日病院に通院して抗生物質の点滴を受ける。その後急いで帰って白衣を着て仕事をする。

「薬局を軌道に乗せる大事な時期に、自分が入院することはできない。なんとか早く治してください！」と、医者に懇願していたことを思い出します。しかし、症状は一向に改善しない。極限の肉体的精神的ストレス。いよいよリンパ節の腫れも大きくなり、頸部の痛みで食事も出来ず、微熱状態から仕事への集中力もどんどん低下していく。

そして、ついに観念して入院を決意。白血病の患者さん達と同室になったということもあり、職業柄、その方々の薬や点滴に目をやると、毒々しい色の抗がん剤。専門知識があるだけに、「自分も悪性腫瘍かもしれない...」と考えたりしました。「太田さん、もう一度CTを撮りましょう」と医者に言われたときには「それは、悪性かもしれないということですか！」と我を忘れて詰め寄りました。「人様を治す立場なのに、なんと情けない...」「精密検査で悪性リンパ腫だったら、妻子はどうなる？まだここで死ぬわけにはいかない...」と、入院ベッドで一人泣したことを覚えています。

無事に退院できたものの。退院後は首に包帯を巻いて相談を受けていました。「1日も早く退院させて欲しい！」と、無理を言ったばかりに。しかし、この苦難と挫折がなければ、10周年を迎えることは出来なかったかもしれません。それは、自らの病気を自らの漢方で治せず、新薬の抗生物質でも治らなかった（外科手術で治った）という、今思えば貴重な経験をしたからです。「自分の都合勝手に病気は治らない...」自らの生き方を猛省しました。それからは、「薬で病気を治す」という薬剤師としての限界を痛感し、「病む」ということの本質を考えるようになりました。「病気をどんな薬で治すか」よりも、「なぜ人は病気になるのか？」という真理を追求するようになりました。

## 「つながり」を大切に

「膝が痛くて整形外科に通っていますが、なかなか痛みが取れません。それでこちらに相談に来ました」...。よくお受けするご相談です。みなさん揃って、鎮痛剤（痛み止め）とシップを処方されています。

しかし、膝痛で相談にみえる方々の大半が、血圧の薬も飲んでいることにふと気づきました。他に、心臓の薬、コレステロールを下げる薬、睡眠薬など。そして、月・水・金は整形外科、火曜日は内科、木曜日は眼科と、病院通いを日課にしている「薬漬け」の患者、病院の「お得意様」である患者さんの多さにも。

現代医学（西洋医学）は、身体を細分化して治そうとする。私が東洋医学の道を歩むことを決心したのは、この点に大きく疑問を感じたからです。

身体をバラバラに考えて、各症状をそれぞれ治そうとする。

しかし人間の身体は1つ。そこで営まれている「つながり」を無視してよいのか？

膝が痛いこと、血圧が高いこと。心臓が弱いこと、眠れないこと。

そこには共通の原因があるのではないか？

その共通の原因が「血流」にあること、また血流が「体質」「気質」を示唆することにも気づきました。

痛み止め、降圧剤、強心剤、睡眠薬の4つの薬を処方するのではなく、「体質」と「気質」を改善する漢方相談を心がける。1つの処方で複数の症状を一発で治す。

これが漢方の醍醐味でもあり、私の信条です。

その繰り返しと、ささやかな実績があって今日があると自負しております。

当局を開業当初からご利用してくださっている、とある70歳の会社社長さんからこんなお褒めのお言葉をいただきました。

「あなたの素晴らしいところは、お若いのに正義を貫いているところです。

だから私は長年こちらの薬局のお世話になっています。金・地位名誉を欲するなら、今の形態では無理でしょう。医療もビジネス。薬を出せば出すほど儲かる。診療科目が複数あるから、そこに営利がそれぞれ発生する。しかしあなたは、長時間一人一人のお客さんの話に傾聴して、最小限の処方を出してくれる。病気ではなく、人を診ている。私はあなたのそうした純粋なところに惚れているのです」

本当にありがたいお言葉です。

## 病気 血流 身体 こころ

「大半の病気の原因はストレスにある」。周知の事実であるのに、そのストレスから無意識に逃避して解決できない人が、実に多いと感じます。

たとえば、女性の生理痛や子宮筋腫。生理痛には痛み止め、子宮筋腫は外科手術で摘出すればよいという考え。そんな安易な対症療法ではいけないと思います。

「女性は子宮で考える生き物」という格言があります。子宮と脳（思考・感情）は密接に関係しています。脳の苦痛（こころ）が、子宮（身体）に現れる。

血流が停滞すれば、経血は塊となり、痛み（生理痛）が生じる。子宮筋腫を医学用語でヒステリオミオーマと呼びます。「ヒステリー」が原因で筋腫が生じる。

そのヒステリーの原因が、夫・舅姑・兄弟姉妹との不仲、子供の反抗といった精神的ストレスにあることを無視できません。

## 病気 血流 家族のつながり

人生は「修行」である。その毎日の修行の場が「家族」です。

子宮筋腫や乳がんは、家族・親戚との確執、職場の人間関係といった、長年のストレス（怒り・我慢・落ち込み）から生じることが多いと感じます。

話は変わりますが、以前、お子さんの腹痛・下痢・中耳炎の相談を受けました。

小児科、耳鼻科に通っても完治しない。薬を飲んでしばらくは良いが、また再発してしまう。子供に抗生物質を長く飲ませるのはよくないという思いから、当局に相談にみえました。

子供の病気も、やはりストレスが原因です。繰り返す腹痛・下痢は、もちろん食中毒ではありません。ストレスからの自律神経失調です。では、中耳炎は？

「聞きたくない！」という子供の拒絶が、中耳炎・難聴といった耳の病気になっていると感じました。では、何を聞きたくないのか？子供のストレスは何なのか？

それは、イライラしたお母さんの怒声や涙声、お父さんの怒鳴り声でした。

お子さんの病気の根本原因は、親御さんの頻繁な夫婦喧嘩にありました。

適切なアドバイスを親御さんに与え、夫婦円満を意識してもらい、その上でお子さんに漢方を処方。しっかり治せました。

「病は家族から」。

家族が健康で過ごすためには、お互いに相手を思いやる心と感謝の念が大切だと、この仕事を通じて悟りました。家族の健康維持と幸福には、まず女性の健康が必須です。そして特に子供には「母性愛」が欠かせないということも。

## 神仏宗教 太田東西薬局 西洋医学

西洋医学が慢性病を完治できないのは、その人の身体は診ていても、「こころ」を捉えていないからです。強引に化学薬品や手術で病気を退治しようとするから、副作用や他の病気に見舞われるのです。

10年間で1000人近い血流を診ながらお客様の相談に真摯に耳を傾けてきました。相談室は「笑い」もありますが、「涙」もたくさんあります。悩みの相談を受け、結果を出す使命。不謹慎ですが、これまで何度もこの仕事を辞めようと考えました。ご相談を受け、その人の病気を治すためには。漢方だけではダメです。その人の考え方・生き方への進言、その人が属する家族関係の修復が必要となってきます。しかし、選薬以上に、その人の「考え方・生き方」「家族」を変えることは難しいものです...

西洋医学の対極にあるのが、神仏宗教です。私は、真の神仏宗教は敬虔していますが、残念ながら昨今、物質（カネ）至上主義は宗教界も例外ではないようです。「拜んで布施を続ければ、どんな難病でも治る！」という考えを受け入れることはできません。

先月、あるお寺のご住職と約3時間面談させていただきました。日頃、お客様には自信を持って指導している私も、世の中の健康観と自らの考えのギャップに日々苦しみます。その苦悩から脱するには「山ごもりするか、出家するしかない...」とまで考えたこともあります。ご住職とはある書籍を通じての初対面でしたが、私の健康観である「病気 身体・こころ 母性愛」に賛同していただきました。さらに「こういう世の中だからこそ、我々も多くの人に信仰を持ってもらいたい。家族一同で「こころ」を高めて欲しい。しかし、こういう世の中にしたのは、我々、神仏宗教界の墮落が原因でもある」とおっしゃられました。

戦後の欧米化は、医学だけではなく、神仏宗教界にも影響を及ぼしています。西洋医学の躍進は、日本人の宗教観、生命への尊厳や畏怖を衰退させました。「祈って病気が治るなら苦労はしない。目にみえるものこそすべて」。そんな唯物論者が、正月に「今年こそ良い一年でありますように！」と神社でお参りしたり...。困ったときの神頼み。こうした自己中心的な人が増えています。

太田東西薬局は「身体とこころのバランス」を考える場所です。それが皆さんの「幸せ」につながると確信しております。家族全員で「身体とこころ」を高めていくことが、家族全員が、ひいては社会全体が幸せになる、一番の処方箋である。

これが開業10年の私が悟ったことです。